

今日の福音で、マルタは喜んでイエス様を自分の家に迎え入れました。ところが、それから彼女はとても忙しくなり、イエス様の一行だけでなく、多くの人たちにもてなしをしなければなりません。それは、イエス様がマルタの家におられると聞いて、その村の人たちがその家に訪ねてきたからでしょう。彼らの世話をしていたマルタの目に映った自分の姉妹のマリアの姿は、うらやましきのあまり、憎たらしくも見えたはず。なぜなら、マリアはマルタを手伝うどころか、ずっとイエス様の足もとに座って、その話を聴いていたから。そこで、マルタは自分だけにもてなしをさせていたマリアについてイエス様に訴えたわけです。しかし、イエス様はマルタに、「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」と言われました。そのイエス様の話は、一見マルタを戒めておられるように聞こえますが、それは、彼女を悟らせるためのお言葉だったのでしよう。おそらくマルタは多くの人たちにもてなしをしているうちに、自分が誰を迎え入れたのかを忘れてしまったかもしれません。もしかしたら、マルタの視線はイエス様にではなく、ずっとマリアを突き刺していたのではないのでしょうか。残念なことに、マルタは多くの人びとや、憎たらしいマリアに気を取られていたのです。そんな状況で、もはやマルタの心に喜びや平和があるわけがなく、彼女の心は憎しみと恨みに満ちて、イエス様を迎え入れたことすら後悔していたかもしれません。

マルタは自分の家にイエス様を迎え入れましたが、心は別のところに向かっています。そこでイエス様は、マリアがとどまっていたイエス様の足もとに、マルタも

招まねいてくださったのです。それは、マリアやマルタだけでなく、そこにいたおお多くの人ひとたちにも当あてはまることでした。つまり、イエスさま様が望のぞんでおられたのは、彼らもイエスさま様の足もとに集あつまり、イエスさま様を中心ちゆうしんとして一つの群むれとなることだったのです。そう考かんがえたら、マルタの役割やくわりは多くの人おおたちへのもてなしではなく、彼らかれをイエスさま様のもとに導みちびくことだったのでしょう。

教会きょうかいも同様どうようです。教会きょうかいは世よの中なかでさまよっている人ひとたちや、色々いろいろなことに拘こたわっている人ひとたち、悩なやんでいる人ひとたち、また、苦しくるんでいる人ひとたちをイエスさま様のもとに招まねくものなのです。それは、その人ひとたちも、わたしたち信仰しんこうのある人ひとたちと共に、イエスさま様の一つの群むれとなるためです。教会きょうかいがそうなるためには、わたしたち一人一人ひとりひとりが、先まずイエスさま様のみ言葉ことばと、イエスさま様の御体おんからだと御血おんちの秘跡ひせきであるミサしたに親したしくならなければなりません。今日きょうの第一朗読だいいちろうどくで、神様かみさまは三人さんにんの人の姿すがたでアブラハムあわらに現あらわれました。アブラハムはその人ひとたちが神様かみさまだとは思おもいませんでしたが、旅人たびびとにもてなしをする慣習かんしゅうにしたがって、彼らかれを自分じぶんの天幕てんまくに迎むかえ入れたわけいです。アブラハムはその人ひとたちが食事しょくじをしている間あいだ、目を離めさず、すぐそばはなに立たって給仕きゅうじをしました。それは、神様かみさまに仕つかえる人ひとたち、すなわち、わたしたちが学まなぶべき模範もはんでしょう。しかも、わたしたちは皆みな、真しんの命いのちのパンであるイエスさま様の食卓しょくたくに招まねかれて、イエスさま様に仕つかえている人ひとたちです。この大事だいじな食卓しょくたくに招まねかれているのであれば、その食卓しょくたくだけめに目を注そそぎ、また、耳みみを傾かたむけるのは当あたり前まえでしょう。それこそ、イエスさま様に仕つかえる第一歩だいいっぽだと言いって過言かごんではありません。ミサまの前まえにはこの聖堂せいどうで、説教せつきょうや他の読たみ物よではなく、その日ひの御言葉みことばを静しずかに読よみ、また、黙想もくそうすることが大事だいじなことです。

そして、ミサが終わったら、しばらく沈黙の中で感謝の祈りをささげることが必要です。それによって、わたしたちは御言葉とご聖体で養われて、イエス様の救いの御業を証しし、また、宣べ伝える、いわゆる宣教の力と知恵を得ることができるのです。

今日の第二朗読で、使徒パウロは自分の使命について語りながら、キリスト・イエス様がすべての人の栄光の希望であると言いました。言い換えれば、神様の慈しみによる救いの計画、すなわち、罪の赦しによる救いはイエス様を通して明らかになり、すべての人がイエス様の十字架の死と復活を通して、救いの希望を得られるということです。パウロは、自分がその救いの知らせである福音を証しするために選ばれ、その使命を果たすために受ける色々な苦しみは、イエス様の欠けたところを自分の身をもって満たすものだと言いました。それによって、パウロは自分がイエス様に仕え、また、教会に仕えることになると思ったはずですが、救い主としてのすべての使命を全うされたイエス様に、欠けたところなどあるはずがありませんが、それはわたしたちに任せられた使命を表す表現でしょう。それはイエス様のように生きることによって、わたしたちもイエス様と教会とに仕える人となるのです。教会の中でも外でも、喜びと悲しみ、苦しみや悩みを共にし、互いに支え合うことが大事です。奉仕においても、自分一人で考えたり、決めたり、やったりせず、すべてのことは共にすべきで、一つの事でもみんなが共にすることこそが、イエス様の体である教会にふさわしい姿に違いありません。わたしたちがイエス様の食卓でみ言葉とご聖体によって養われ、すべてを共にすれば、それによって神様は讃えられるで

しょう。これからもそういう<sup>きょうどうたい</sup>共同体を<sup>めざ</sup>目指して、<sup>あゆ</sup>歩んでまいりましょう。